共に生きるために

2022年度 事業報告書

April 1, 2022 - March 31, 2023

学校法人 アジア学院

共に生きるために　2022年度 事業報告書

現在も新型コロナ感染症は終息したとはいえません。しかし2022年度のアジア学院においては、海外からひとりの学生も迎えられずにいた前年度とは大きく変わり、2019年から入学を待っていた学生も含めて31名に及ぶ本科生を世界14ヵ国から迎え入れることができました。5名の研究科生を加えると学生総数は36名となり、多様性と活気にあふれるアジア学院が戻ってきました。勿論、マスク着用、パーテーション越しの食事、ホームステイの中止など、制約が完全に無くなったわけではありませんでした。しかし、世界の農村指導者がひとつの所に集められ、「食」と「いのち」を大切にする生活を基盤に、共に生きることのできる社会の創造に向けて学び成長する研修を無事に終えることができました。多くの方々からのお支えに心から感謝いたします。

しかし、目を世界に向けてみると、2022年度は目を覆いたくなるような混乱や惨事が続きました。ミャンマーでの軍事政権下の人々の困窮、ロシアによるウクライナ侵攻に伴う多くの人々の苦しみと世界に波及する影響、大国間の緊張は、コロナ禍で弱った多くの社会と個人に、さらなる痛みと不安を与え続けています。

このような混乱の時代をアジア学院はどのように受け止め、対応してきたでしょうか。アジア学院は荒波の中を漂う小舟のような小さな存在です。しかし、行くべき進路は神様によってしっかりと定められていることを確信しています。転覆することもなく、むしろ震災とコロナ禍で強くなったレジリエンスを再確認することができたように思います。アジア学院には、より効果的に人々に仕えることのできる農村リーダーになることを目指し、共同体での学びを切望する者たちが、様々な困難を乗り越えて呼び集められて来ます。アジア学院での研修を共に作り上げたいと願い、惜しみない協力を捧げてくださる多くの方々が研修を支えてくださいました。また、そのような学び舎を体験してみたいと惹きつけられた多くの若者たちも加わり、50周年に向かおうとするアジア学院に勢いを与えてくれました。

2023年度はアジア学院創立50周年を祝う年です。旧約聖書には、50年目が「ヨベルの年」(Year of Jubilee)と呼ばれ、人々が様々な苦難から解放される年であったことが記されています。そのことから「ヨベルの年」は、贖罪、解放、再生を表すとも言われています。アジア学院では「ヨベルの年」を起点として、次の50年に向けて「共に学ぼう、農村の未来のために」というテーマを掲げています。このテーマの下、「土からの平和」、「フードライフ」、「気候正義と気候変動対策」、「教育」、「組織」の5つの分野からの総合的な働きをしていく計画を打ち出しています。新たな歩みを始めるアジア学院を引き続き皆様のお祈りの中に覚えていただき、ご支援、ご協力を頂けましたら幸いです。

日本バプテスト同盟全国女性会から寄贈された浴衣を試着する学生たち

山本 俊正
理事長

荒川 朋子
校長

目次

農村指導者を育てる
待ち続けた研修参加 4
農村指導者研修プログラム・カリキュラム 8

オープン・ラーニング みんなの学び舎
やっと開けた！オープンラーニング 9
スタディキャンプ ハイライト 10
イベント・プロジェクト ハイライト

コロナ禍を乗り越えた コミュニティ・ライフ
音楽が戻ってきた！ 12
コミュニティメンバー一覧 13

アジア学院のフードライフ
手間ひまかけて 丁寧に 14
主な農産物生産量 15
地域資源の活用と伝染病対策 16
多様性の中で共に食べるために 17

サポーターと共に
時間を共にすることの力 18
アジア学院を再び世界に開く 19
シナジーが生み出す、前進する力 20

農村を動かす卒業生たち
インドネシアの卒業生を訪ねるキャンプ 22
コイノニア座談会 24
チェンジメーカーとしてCNNに登場
種の畑 25
食と教育
私のコミュニティには食べ物がある

その他のトピック
2022 Snapshots 21
会計報告 26
2022年度卒業生 28

農村指導者を育てる

Nurturing Rural Leaders

農村指導者研修プログラム

“

アジア学院に来たことで、私の生き方や考え方は、人生のさまざまな側面で大きく変わりました。アジア学院のコミュニティで生活する私たちは、その違いを通して、ベストを尽くし、どこにいてもゆっくりと、しかし確実に世界を変えていくことを約束します。

ティモティ・センタム（ウガンダ）

待ち続けた研修参加

2022 年度 研修プログラム報告

大柳 由紀子
副校長・教務主任

2022 年度も神様の豊かな恵みとお導きのうちに、14 ヵ国 31 名の学生が無事に研修を終えることができました。この研修を物心両面でお支えくださった方々に感謝いたします。

新型コロナ感染症が世界中に広がるなか、20 年度は 19 名の入学予定者が来日を断念し、21 年度は海外からの渡航が一切できなくなりました。それでも研修参加をあきらめなかった 20 年度、21 年度の入学予定者、及び 22 年度の合格者のうち、研修参加が可能な者が今年度の学生となりました。とはいえ 4 月の研修開始当初は本科生わずか 6 名と日本人研究科生 3 名のみ、不安なままの出発でした。最初の海外からの到着は 4 月 20 日のインドネシア人研究科生、21 日のグアテマラ人本科生 2 名でした。その後は次々に来日をはたし、6 月 8 日までには予定していたほぼ全員がアジア学院へとやってきました。研修参加を待ち続けた彼らの学習意欲は非常に高く、学びと成長を続けて卒業の日まで全力疾走してくれました。

学びのコミュニティ

今年の最大の特徴となったのは、一斉に研修を開始できなかったことそのものでした。いつまた国境が閉まるかわからないという不安の中、ビザが取れ次第１人、２人と五月雨式に来日となったことから、受け入れる学院側は常にオリエンテーションを行っているような状態が続きました。補講も何度も行われました。しかし同時に、「先に研修を始めている学生が遅れて来た学生をフォローする」という助け合いの文化も醸成され、学生同士の関係性がとても良い年だったと感じます。互いに思いやり、励ましあい、学びあう姿勢は、学院の研修の３つの柱「学びのコミュニティ」の一つの完成形であったのではないかと思っています。

もちろん簡単なことばかりではなく、意見や考えが合わずにぶつかることもありました。最初のうちは英語がわからずに途方に暮れる学生もいました。自分が学ぶべきことを見失いそうになった姿もありました。文化の違いやスケジュールの大変さに落ち込むこともありました。研修を止めて帰国したいという気持ちを聞いたことも一度ならずあります。母国の治安状況の悪化や家族の健康状況の心配事も起きました。地元で災害が起きた学生もいます。それでも学生たちはボランティアや職員、研究科生の支えも受けつつ、何よりも互いが互いのために祈りあいながら研修を完遂したのです。

（写真上）授業風景
（写真下）職員によるコンサルテーションの様子

実践で学ぶリーダーシップ

アジア学院は農村指導者を養成する学校です。学生たちはその多くが、農村での働きに必要な知識と技術を求めて研修に参加を決めています。その思いにこたえるべく、アジア学院では草の根のリーダー育成のための研修が組まれています。授業はリーダーシップの技術や姿勢、持続可能な農業の知識や技術、環境問題、平和構築など多岐にわたります。座学で学んだことは、日々の生活で実践を求められます。畑や家畜、キッチンでの朝夕の作業時は、学生たちが交代でリーダーを務めます。「収穫感謝の日」のイベントも研修旅行も学生がリーダーとなります。地元コミュニティでのリーダー経験のあるクラスメートたちをリードする難しさ、しかも第一言語ではない英語を用いてのコミュニケーション、ファシリテーションです。職員のことさえもリードしていくことが求められます。そういった日々の実践を通して、学生たち一人一人は「サーバントリーダーとはなにか」について考えを深め、自己を振り返り、自信を身に着けながら成長していきました。それは授業だけ、知識だけでは身に着けることのできない学びであったと思います。

卒業していった彼らがそれぞれのビジョンに向かって働き続けることを願います。なぜならば、彼らのビジョンは、自らのためのものではなく、人々のために働き続けることだからです。自分たちがその成果を得るのではなく、人々の幸せな未来の実現を願う彼らの成長に、少しでもアジア学院が関われたことが私たちの誇りです。

“

アジア学院で学んだことをすべて実現するのは簡単ではありませんが、小さな一歩から大きなものを生み出していきたいと思っています。自分の身の回りにあるもの、周りの人たちが必要としているものから始めること、このような考え方が、「必要なものはあなたの周りにある」という気づきをもたらしてくれるのだと思います。

タビタ・プリシラ・ラハワリン（インドネシア）

4月

4月の入学式は日本人学生４名、在日エチオピア学生２名、日本人研究科生３名のみでした。

5月

5月末までには多くの学生が到着し、２度目の入学式を行いました。

6月

クラスの雰囲気はコロナ以前のようです。

8月

7月

授業で作ったリソースマップを職員会議で共有してもらいました。

研修のハイライト

9月

10月

2 年ぶりにお客様を迎えての収穫感謝の日。テーマは「みんなの違いが世界を救う」

11月

西日本研修旅行。フル日程は実に４年ぶり。

12月

本科生 31 名、研究科生 1 名が無事に卒業を迎えました。

農村指導者研修プログラム・カリキュラム

講義一覧 （* 特別講師）

指導者論

アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型農村調査法	荒川 朋子、大柳 由紀子
自律学習	大柳 由紀子
プレゼンテーション技術	大柳 由紀子
ストーリーの伝え方	スティーブン・カッティング
時間管理法	ティモティ・B・アパウ
ファシリテーション技術	大柳 由紀子、阿部（チャタジー）マノシ
フィードバックの仕方	阿部（チャタジー）マノシ
ディスカッションファシリテーション	阿部（チャタジー）マノシ
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・B・アパウ
報告書作成指導	阿部（チャタジー）マノシ
農村指導者とは誰か	スティーブン・カッティング
アジア学院学生とはどんな人たちか	阿部（チャタジー）マノシ
ソーシャルビジネス	功能 聡子 *（特定非営利活動法人 ARUN Seed 代表）
平和と和解	ホームズ 恵子 *（アガペ・ワールド）
資金調達法	シェリー・デーリオン *（アジア学院北米後援会）
尊厳	ジェフリー・メンセンディーク *（桜美林大学准教授）

持続可能な農業・技術

有機農業	荒川 治
野菜・作物概論	荒川 治
稲作技術	荒川 治
畜産概論	大谷 崇、眞木 凌
養鶏技術	ティモティ・B・アパウ
作物病害虫管理	荒川 治、櫻井 将伸
家畜衛生と疾病管理	大谷 崇、ティモティ・B・アパウ、眞木 凌
化学農業の危険性	櫻井 将伸
熱帯における自然農業	村上 真平 *（自給自足カレッジ監修）
生産者と消費者の提携	戸松 礼菜 *（帰農志塾）
バイオガスワークショップ	桑原 衛 *（NPO ふうど代表）
水撃ポンプワークショップ	柴田 勉 *（NPO アジアの水と循環型農業代表理事）
森林管理	塚本 哲也 *（トチギ環境未来基地代表）
農業技術実習	荒川 治、櫻井 将伸
畜産技術実習	大谷 崇、ティモティ・B・アパウ、眞木 凌
肉加工実習	大谷 崇、小出 秀夫 *（ノイ・フランク那須）

開発論

栄養概論	金森 郁美
共助組合論	大柳 由紀子
ジェンダー論	荒川 朋子
ローカライゼーション	鎌田 陽司 *（NPO 法人「懐かしい未来」代表）
環境と開発	佐藤 真久 *（東京都市大学教授）
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	坂原 辰男 *（元田中正造大学事務局長）
気候変動教育	永田 佳之 *（聖心女子大学教授）
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
学校給食と食育	金森 郁美
日本のホームレス問題	大柳 由紀子、阿部（チャタジー）マノシ

卒業生セミナー

組織的持続可能性	ウェスリー・リンガ *（93 年卒、99 年 TA・インドネシア）

日本語・日本文化	小倉恭子 *

有機農業実習

野菜作物：ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、自然農薬、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り
畜産：養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎
肉加工：ソーセージ、ハム、ジャーキー

農場管理活動

グループによる農場管理（野菜作物栽培および畜産管理）
フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈り、森林管理など）、内的成長を促す活動（朝の集会、コンサルテーション、リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行など

研修でお世話になった方々（敬称略、順不同）

農業関連見学・研修先
【栃木県】帰農志塾、まんまる農園、ドンカメ、陽だまり農場、古谷農産、グリーンファーム水口、民間稲作研究所**【埼玉県】**金子美登・金子宗郎、田下隆一、桑原衛

見学先・交流団体
【栃木県】足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所跡）、渡良瀬遊水地、クリーンセンター下田原、宇都宮北高校、（教）西那須野教会、（教）那須塩原教会、家の教会しおん、大田原キリスト教会、（教）小山教会、（教）鹿沼教会、鹿沼キリスト教会、（教）塩谷一粒教会、（キ）栃木教会、（キ）宇都宮松原教会、（教）宇都宮上町教会、（教）足利東教会、（教）氏家教会、（教）益子教会
【群馬県】（教）島村教会、（教）太田八幡教会**【茨城県】**（教）竜ケ崎教会

西日本研修旅行
【東京都】農村伝道神学校**【静岡県】**聖隷クリストファー中・高等学校、聖隷学園、（教）遠州栄光教会、山中忍**【三重県】**愛農学園農業高校**【大阪府】**大阪 YMCA、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク、関西沖縄文庫、聖公会生野センター、ひらく学校、（教）希望ヶ丘教会**【広島県】**広島平和記念資料館、小倉桂子（被爆証言）
【熊本県】竹崎歩、大澤菜穂子、からたち、水俣病歴史考証館、坂本しのぶ（証言者）、石原明子、吉本哲郎

（医）医療法人（医社）医療法人社団（学）学校法人（カ）カトリック（株）株式会社（教）日本基督教団（キ）日本キリスト教会（公）日本聖公会（公財）公益財団法人（公社）公益社団法人（財）財団法人（社）社団法人（宗）宗教法人（特活）特定非営利活動法人（バ同）日本バプテスト同盟（福ル）日本福音ルーテル教会（有）有限会社

オープン・ラーニング みんなの学び舎

Open Learning Programs

iLEAP スタディキャンプの様子

やっと開けた！ オープンラーニング

募金・国内事業課
教育プログラム報告

山下 崇
募金・国内事業課長
(教育プログラム・
那須セミナーハウス主事)

コロナ禍で様々なことを制限されてきた若者たちから「どうせできない」というあきらめの声をたくさん聞いてきました。そして、この２年間アジア学院の合宿プログラムもほとんど行うことができず、その役割を果たしていけない私たち自身も、苛立ちや無力感を感じずにはいられませんでした。

2022 年度こそは体験を奪われ続けた若者たちのふさがれた気持ちを開放し、「学びと楽しみをアジア学院で分かち合いたい！」という思いで、今年度のオープンラーニングプログラムのテーマを、「Open!　安心、ワクワク、帰ってこられる場所」としました。

今年度は 1000 人を超える人たちを迎えてきましたが、懸念していた新型コロナ感染症は、丁寧に対策を行ったことで参加者に一人の感染者も出すことはありませんでした。

やっと「Open!」が叶い、参加者と心安らぐ時間とワクワクする気持ちを共有することができました。

スタディキャンプハイライト

“アジア学院は
自分が一番自分らしく居られる場所

国際基督教大学 × 学生キリスト教友愛会

自由の森学園

佼成学園女子高校

セントオラフ大学

“こんなにも自分は
のびのびと過ごせるんだって
感じました。みんなで歌って
踊って祈って食べて…
その一つ一つがあたたかくて
うれしかったです。

JELA

“アジア学院は
大きな家のようだった

スタディキャンプ参加団体

【国内】世界宗教者平和会議(WCRP) 日本委員会、パーマカルチャーデザインコース、摂南大学、フェリス女学院大学、筑波大学附属坂戸高校、国際基督教大学×学生キリスト教友愛会、国際基督教大学和解フォーラム、自由の森学園高校、JELA、共愛学園高校、京都精華大学、明治学院大学、新島学園短期大学、明治大学寺田ゼミ、桜美林大学、恵泉女学園大学、同志社大学アジア学院プロジェクト、聖心女子大学（オンライン）、アグロエコロジー研究会、同志社大学マーサゼミ、佼成学園女子高校、立教大学 YMCA、立正佼成会学林光樹グループ

【米国】iLEAP、San Francisco Troop 12、セントオラフ大学

イベント・プロジェクトハイライト

【古本市】
全国から寄付された圧倒的な量の蔵書とお手製インドカレーで年々人気を増しています。

【アジア学院フレンズデー】
サポーターの集いとマルシェを掛け合わせた初の試み。レポートは 18 ページ、20 ページ。

【English Farm Camp】
家族で農業と英語を体験できるゴールデンウィーク恒例イベント。

【ちょこっとファーム】
那須塩原市内の有機農産物ショップ・サンノハチと日帰り農業体験イベントを共催。

“初めてサツマイモ堀りをしました。
人と触れ合うことで本当にたくさんの
ことを学べると実感しました。
サツマイモづくしご飯はとてもおいし
かったです！

【甲状腺エコー検査】
関東子ども健康調査支援基金主催。アジア学院を会場とし、地域の人々に甲状腺検査を提供。

【インドネシアの卒業生を訪ねるキャンプ】
海外スタディツアーは 5 年ぶり。レポートは 22 ページ。

【オフグリッドハウス建設】
ビジターやボランティアを巻き込んでの建設。詳しくは 21 ページ。

コロナ禍を乗り越えたコミュニティ・ライフ

Community Life after COVID-19

音楽が戻ってきた！

共同体生活報告

眞木 メレディス
共同体生活
コーディネーター
（～2023年２月）

農村指導者研修プログラムは、2年間10名以下の学生で実施されたので、2022年に圧倒的な数の海外からの学生が来日したことに驚かされました。アジア学院では「まさか全員が来るとは思わなかった」という言葉をよく耳にしました。彼らは少しずつやってきて、6月にようやく全員が揃いました。到着が遅れたため、アジア学院のコミュニティが形成され、アイデンティティが確立されるまでには時間がかかりました。しかし、毎週新しい学生が来ることが発表されたため、期待感とお祝いの気持ちが生まれ、到着の奇跡を毎回拍手で迎えました。そして、新入生が「旧入生」となり、次に到着した学生に手ほどきをし、寮はやがて満室になりました。寮だけでなく、教室も、食堂も、外のステージも、どこもかしこも人でいっぱいでした。

もちろんその満員ぶりは空間だけでなく、さまざまな形で表れていました。私にとって何度も頭に浮かんだ言葉は「音楽が戻ってきた！」でした。ピアノ、ギター、手拍子、太鼓、歌、踊り、叫び……朝から晩まで、アジアとアフリカの学生が音楽を奏で、歌っているのが聞こえ、ゴスペルの聖歌隊も活気に満ちていました。朝の集いでは、司会者がみんなを巻き込み、歌や踊りを共にすることもしばしば。バスの中では、外まで聞こえるほどの大音量で歌い、音楽が流れていました。世界各地の食や文化を祝うフードカルチャーナイトでは、国歌を歌うこともありました。朝のミーティング後のちょっとした移動時間でさえもお決まりの歌を歌い、踊っている人がいました。

今年は喜びの精神に満ちた年でした。学生の中には２年前から待っていた人もいたからかもしれません。パンデミックだけでなく、政情不安や自然災害など、母国では多くの人が困難に直面し続けていたからかもしれません。いずれにせよ、感謝の気持ちがあったでしょう。生きていることに感謝し、アジア学院に共に集まれたことに感謝します。まさか全員が来てくれるとは思っていませんでしたが、本当によかったです。音楽が戻ってきて、私たちは喜びでいっぱいです。

コミュニティメンバー 一覧

職員

荒川 朋子	校長
荒川 治	副校長、教育部長、農場長（フードライフ課長）
大柳 由紀子	副校長、教務主任（教務課長）
佐久間 郁・ヴェロ	事務局長（総務課長）
キャシー・フローディ	国際関係課長
阿部（チャタジー）マノシ	教務課（学生募集、教務）
篠田 快	教務課（学生募集、50周年事業）
スティーブン・カッティング	教務課（卒業生アウトリーチ）
田仲 順子	教務課（図書）
ティモティ・B・アパウ	チャプレン、教務課（共同体生活）、フードライフ課（畜産）
ジョナサン・マッカーリー	チャプレン、教務課（共同体生活）
眞木 メレディス（～2023年２月）	教務課（共同体生活）
マッカーリー 里美	教務課（共同体生活）
櫻井 将伸	フードライフ課（野菜・作物）
大谷 崇	フードライフ課（畜産）
眞木 凌（～2023年２月）	フードライフ課（畜産）
金森 郁美	フードライフ課（FEAST〔給食・食育〕）
ラビアル・ラモン・J・エスメリオ	フードライフ課（FEAST〔給食・食育〕）
井澤 酪	総務課（総務補佐）
杉崎 由佳	総務課（会計）
安藤 香	総務課（庶務）
山下 崇	募金・国内事業課長（教育プログラム・那須セミナーハウス主事）
ルイパ・ヴェロ	募金・国内事業課（那須セミナーハウス補佐・管理人）
中山 紀子（～8月）	募金・国内事業課（広報・教育プログラム）
佐藤 裕美	募金・国内事業課（販売・広報）
福島 昌代	募金・国内事業課（食品加工）
江村 悠子	募金・国内事業課（支援者サポート）

業務委託

藤嶋 トーマス 逸生	ブランディング、IDシステムデザイン、メディアデザイン
八木沢 淳	メディアデザイン、印刷物編集

ボランティア

通いボランティア
フードライフ課（農場）：林 哲、渡邉 美月、磯 澄菜央、大森 美弥、関谷 桃花、渡部 幸人、藤吉 求理子、風間 優子
フードライフ課（FEAST）：、木村 裕子、鈴木 由美、高村 京子、村山 佳奈子、荒川 千衣子
募金・国内事業課（販売）：猪俣 美恵、柏谷 重明、杉田 万由子、堀内 紀江、三宅 隆史、クリスティ・アパウ、東 千尋、並木 レベッカ、デスイルバ・ビジェンドラ
総務課（営繕）：清水 益夫、伏見 卓、井出 幸男
総務課（経営）：早坂 孝行
総務課（庶務）：平墳 望

ベクレルセンター（放射能測定室）
西川 峰城、藤本 渉平（兼販売）

長期滞在ボランティア
岡崎 基子、久保 雄一郎、谷垣 結生（以上FEAST、農場）、
佐藤 愛希（農場）、エミ・ハーナー（FEAST、学生募集）、
マリー・ケスレア（FEAST、卒業生アウトリーチ）、ヘニング・ナルバッハ（農場、国際関係）、
クレア・オーナー（国際関係、FEAST、農場）、ラッセル・オーナー（FEAST、農場）、
ヤニック・フリードリッヒ（広報、農場）

役員

理事長

星野 正興（～5月）	元日本基督教団愛川伝道所牧師
山本 俊正（6月～）	元関西学院大学教授

副理事長

山本 俊正（～5月）	元関西学院大学教授
門脇 英晴（6月～）	（株）日本総合研究所特別顧問

理事

荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
後宮 敬爾	日本基督教団霊南坂教会牧師
小海 光	公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
佐藤 範明	元ホテルサンバレー那須顧問
永田 佳之	聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
矢萩 栄司	日本聖公会下館聖公教会牧師
山根 正彦	（学）香川栄養学園 常務理事
星野 正興	元日本基督教団愛川伝道所牧師

監事

大久保 知宏	藤井産業（株）執行役員 総務部長
村田 榮	那須ワイズメンズクラブ

評議員

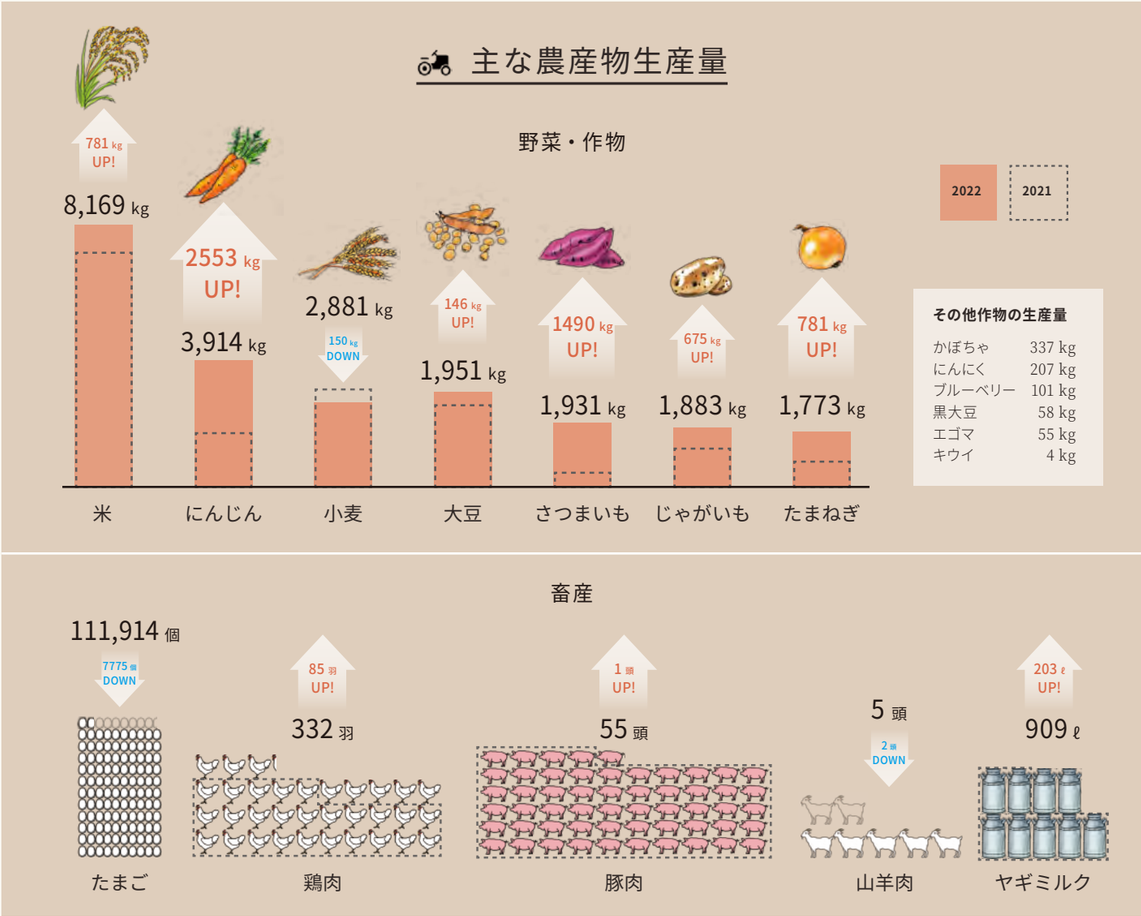
荒川 治	アジア農村指導者養成専門学校副校長
荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
粟谷 しのぶ	弁護士、戸野・田並法律事務所
飯塚 拓也	日本基督教団関東教区宣教部委員長、竜ケ崎教会牧師
伊藤 幸史	カトリック新潟教区司祭
岩谷 幸子	全国友の会中央部中央委員、横浜友の会
宇野 三惠子	聖心会日本管区管区長
海老根 智仁	（株）レジェンド・パートナーズ取締役会長
大柳 由紀子	アジア農村指導者養成専門学校副校長
門脇 英晴	（株）日本総合研究所特別顧問
菊地 功	カトリック東京大司教教区大司教
小海 光	公益財団法人 ウェスレー財団代表理事
佐久間 郁・ヴェロ	アジア農村指導者養成専門学校事務局長
千 相鉉	在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
永田 佳之	聖心女子大学現代教養学部教育学科教授
潘 炯旭	日本基督教団西那須野教会牧師
星野 正興	元日本基督教団愛川伝道所牧師
丸谷 一耕	特定非営利活動法人木野環境代表理事
山下 崇	アジア農村指導者養成専門学校職員
山根 正彦	（学）香川栄養学園 元常務理事
セラジーン・ロシート	NGO/NPO コンサルタント
横手 仁美（2023年２月～）	元国連WFP協会事務局長・理事

特別顧問

遠藤 抱一	元アジア学院職員

アジア学院のフードライフ

Foodlife at ARI



手間ひまかけて丁寧に

野菜・作物部門報告

櫻井 将伸
フードライフ課
(野菜・作物担当)

収穫の喜びはやがて驚きへと変わりました。一日ではとても収穫しきれないほどのニンジンが獲れたのです。その総量、3,914 kg。アジア学院史上最高収量を記録しました。2022 年は天候にも恵まれ、又根や亀裂の入ったものが少なく、高品質で味の良いニンジンをたくさん収穫することができたと思います。

真夏の 8 月半ばから学生とボランティアのみんなで種をまきはじめたニンジン。小さな種子を一箇所に 7 ～ 8 粒づつ播種し、その後は水を切らさないようにして発芽を促します。生物分解性の高い紙製マルチをかけて抑草を試みているものの、隙間から生え出てくる雑草取りは欠かせません。有機農業を実践するアジア学院では手を使い、丁寧に雑草を根っこから引き抜いていきます。生育中期には間引きをし、一箇所にニンジンを一本だけ残して肥大化を狙います。うね間に生えてくる雑草を何度か除草すれば、あとは 11 月末から 12 月にかけて収穫するのを待つばかりです。収穫後はニンジンジュースを製造していただく作業所まで送り出すため、土をきれいに洗い落とします。ニンジンを床にきれいに並べてしっかり乾燥させた後、ダンボール箱にぎっしり詰め込んでようやく出荷となります。約 1 ヵ月後、アジア学院に納入されたニンジンジュースは 6300 本超。普段の 2 倍量となりました。2022 年に収穫したニンジンの出来の良さをぜひ味わっていただけたらと思います。

ひとつひとつの作業を手間ひまかけて丁寧にこなすこと。この大切さを身をもって実感することができた今年のニンジン栽培でした。夏の暑い最中、畑にかがみ込んで種まきに、手取り除草にと根気強く細かな作業に取り組んでくれた学生とボランティアの皆さんには感謝しかありません。冬場のニンジン洗いは冷たい水にお湯を足しながらの作業となりましたが、1 月にアメリカから来てくれたセントオラフ大学の学生さんたちがこの作業を手伝ってくれました。

コロナ禍を乗り越え、普段通りに人が集いはじめたアジア学院。手間のかかる作業もみんなで丁寧にこなし、2023 年も確実な実りを手にしていこうと考えています。

地域資源の活用と伝染病対策

畜産報告

眞木 凌
フードライフ課
（畜産担当）
（～2023年2月）

養豚部門では、コロナ禍や世界情勢により餌代が高騰する中、餌代を逆にどう減らすことができるかが2022年度の目標でした。学院周辺の無償で手に入る資源に焦点を当て、数々の調査と問い合わせにより、餌の大部分を占める炭水化物 (小麦・大麦) を地域のライスセンターから無償で手に入れることができました。それにより、餌代を大幅に削減することができました。

また、学生と共に過ごす時間を増やし、彼らがそれぞれのコミュニティに帰っても豚を育てることができるように積極的にサポートをしました。彼らの地域でも入手可能なバナナの茎を用いた発酵飼料も導入しました。

山羊・養蜂部門では、毎朝、田畑の周りの青草を刈り取り、山羊の飼料としました。外部から飼料を購入しなかったため飼料費はゼロ円、飼料自給率は87%（乾物換算）、無償の地域資源を含めると、すべて２キロ圏内で賄うことができました。

また、木々の広がる未利用の急斜面に放牧場を増設しました。障害物が多い環境で盛んに動き回り、足腰の強い健康な山羊に育ちました。

その一方で、春先から原因不明の急な下痢が蔓延し、わずか数日間で複数の子山羊が命を落としました。原因が判明するまで数ヵ月を要しました。

２年前より開始した養蜂は作物の受粉に貢献し、春には採蜜を計画しています。

養鶏部門では、200日齢の鶏を学生が世話しました。また、家禽管理研修の一環として、学生たちの手によって３種類のワクチンを２回ずつ接種しました。

また、鴨舎の建設も行い、担当した職員にとっても勉強になりました。他に水飲みシステムの改善も行い、冬場の浸水を防ぐため、鶏舎の水道管を廊下に移設しました。

今年も全国的に鳥インフルエンザが流行したため、ボランティアさんの協力で、鶏舎の前に鶏舎専用の脱衣所を建設しました。

多様性の中で共に食べるために

FEAST 報告

金森 郁美
フードライフ課
（FEAST〔給食・食育〕担当）

作物や家畜を育て、その食材で料理を作り、食べる。その残りはまた土に還り、私達の体に還る。全員がその全てのプロセスに関わることがアジア学院のフードライフの営みであり、給食部門は「料理」と「共食」を通してフードライフを実践する場です。

朝晩約50、昼約70人分の食事を用意する中で、宗教上の制約や味付けの嗜好性、主食の違い、食物アレルギーなど、各々が食べられるもの、食べたいものは様々です。一方でアジア学院の気候風土で育つ食材や調理をする人数、時間等、各々の家庭料理とは異なる制約が多くあります。その中で９ヵ月や１年といった長期間を共に暮らす仲間達の心と身体、両方を満たす食事を提供するために、料理の作り手あるいは食べ手は、何ができるのか。「作る」と「食べる」が１食毎に入れ替わる関係性だからこそ、皆がこの問題に自分事として向き合いました。

唐辛子をたっぷり使った料理は全員が食べられるように、半量は唐辛子無しで仕上げる。辛さが足りないときに大人気の作り置き唐辛子ペースト。トウモロコシの粉で作るアフリカの主食とそれによく合うトマトと魚のペースト。ハーブやスパイスの効いた豚骨スープに、野菜の味がしっかりと出たベジタブルスープ。「収穫感謝の日」、へとへとになりながら作ったとっておきの品々。2022年の料理の数々を思い返すと、関わった一人ひとりの姿がはっきりと浮かんできます。

過去２年間に比べ格段に人数が多いコミュニティで、より多様な食事を作ることが課題であり、それを乗り越える鍵もまた、多様な人々にありました。立場や性別、年齢、料理の経験に関係なく、その日の担当が作る食事。多くの人がそれを単なる当番ではなく、自己の成長するチャンスと捉え、その努力がコイノニアの食卓に並べられました。それを分かち合うことがいかに幸いなことか。日々の糧は神、土、食材、そして皆のいのちによって、もたらされたものだと私は思います。

サポーターと共に

Together with Supporters

（写真上）同志社大学にて行った活動報告
（写真左下）関西学院大学チャペルアワー
（写真右下）フレンズデーでのディスカッション

西日本キャラバン訪問先

京都上賀茂教会、同志社大学、神戸ユニオン教会、神戸栄光教会、神戸イエス団教会、天国屋カフェ、賀川記念館はいず、Peace & Nature、関西学院大学、
関西学院聖和短期大学、関西学院中学部、神戸学院大学

時間を共にすることの力

募金・国内事業報告

江村 悠子
募金・国内事業課
(支援者サポート)

アジア学院内部が久々に多くの人で賑わった2022年度は、支援者の皆様とも久々に直接的なつながりを持つことのできた1年でした。顔と顔を合わせて時間を共にすることで、互いに想いを強くし、力を合わせることができることを実感しました。中でも大きかったのは7月のアジア学院フレンズデー、そして11月に9日間行った西日本キャラバンです。

フレンズデーは、マルシェ（P.20 販売活動報告参照）とサポーターの集いを同時開催するという新たな試みです。サポーターの集いでは、研究科生や日本人卒業生・元ボランティアからアジア学院での学びや卒業後の活動を聞くセッションを計3回持ちました。地域に開かれたマルシェと同時開催することにより、アジア学院が初めての方や数十年ぶりの方にも参加していただくことができ、いずれの回も会場は賑わいました。アジア学院の活動をより多くの方に理解していただく機会となったと思います。

西日本キャラバンは、2009年から2019年まで行っていた、西日本の支援者を訪ねる旅です。今年度はコロナ以前まで築いてきたつながりを新たにすることを目標に、職員2名と研究科生3名（インドネシア、ネパール、日本の卒業生）で計12団体を訪問しました。学校の授業等では、社会問題や福祉を意欲的に学ぶ大学生たちがアジア学院や卒業生のユニークな活動に興味を持ってくださり、授業後も会話が弾みました。長年ご支援くださっている教会でも、礼拝メッセージや交流会を通してアジア学院のことがよく分かった、行ってみたくなったという声を多く聞きました。何より、どの訪問先でも大変温かく迎えていただいたことで、多くの方に支えられていることを実感し、感謝に満たされる時となりました。

（写真左上）学生と交流するシェリーさん
（写真右上）ドイツからのボランティアのマリーさん
（写真下）インドのナガランドを訪問するキャシー

アジア学院を再び世界に開く

国際関係報告

キャシー・フローディ
国際関係課

2022年のハイライトは、大勢の学生に加え、サポーターや新しいボランティアに直接会えたことです。過去3年間、Zoomを通してしか会っていなかった人たちと語り合い、大切なことについて話し合い、密接につながることができたのは素晴らしいことでした。秋口には短期滞在者のためのビザが発給され、キャンパスでは多くの新しい人たちに恵まれました。

最初の訪問者の一人は、アジア学院北米後援会（AFARI）のコミュニケーション・ファンドレイジング・コーディネーターであるシェリー・デーリオンさんでした。アジア学院への初めての訪問となった彼女は、コミュニティのメンバーから多くを学び、ファンドレイジングの授業も行いました。また、パートナーである教会も国境を越えた移動を再開し、アメリカやドイツから新しい長期ボランティアが数名やってきました。直接訪問できなかった方に向けては、オフィスでZoomを繋ぐ代わりに、スタッフや学生に会い、キャンパスを擬似体験できるようなバーチャルツアーを提供しました。

私も久々に旅に出て、インドのナガランドにいる卒業生を訪ねることができました。1983年から2022年までの8人の卒業生と2023年の学生が、ディマプール近くのアレムラ・サミュエル（13年卒）の農場に集まりました。卒業生たちは、女性グループ、子供向けプログラム、地元の農家、教会、学校、保健所との活動を紹介し合いました。共に生き、困っている人を助け、互いに交わるというアジア学院の精神は、これらの卒業生と彼らが共に働く人々の中に生き続けています。私は、彼らのエネルギーと情熱に勇気づけられました。

10万円以上の寄付者（順不問）

国内支援団体

奨学金
(一財)新倉会、東京南ロータリークラブ、(一財)JELA、日本基督教団、(カ)聖心会、(カ)聖コロンバン会、(公)東京聖テモテ教会、日本キリスト教協議会、(一財)アジア農村交流協会、(公信)久保田豊基金

諸団体
(公財)森村豊明会、(公財)あしぎん国際交流財団、全国友の会中央部、(公財)全国友の会振興財団、東京霞ヶ関ライオンズクラブ、ワールドファミリー基金、(医社)サマリヤ会、(宗)立正佼成会那須教会、立正佼成会一食平和基金、IKE設計開発事務所、全国教会婦人会連合、(公社)スコーレ家庭教育振興会、(株)トラスト・ソフトウェア・システム、(独)日本学生支援機構(JASSO)、学生キリスト教友愛会

学校
(学)女子学院、(学)青山学院中高等部、(学)国際基督教大学高等学校

教会
カトリックケベック外国宣教会、国際基督教大学教会、(公)聖オルバン教会、(教)西那須野教会、(カ)煉獄援助修道会、横浜ユニオン教会、(教)阿佐ヶ谷教会

海外支援団体

教会
アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）、米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教、カナダ合同教会、合同メソジスト教会世界宣教

諸団体
アジア学院北米後援会（AFARI）、連帯のための宣教会（EMS）（ドイツ）

奨学金
アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）、カナダ合同教会、英国メソジスト教会、合同メソジスト教会世界宣教

海外ボランティア派遣団体

連帯のための宣教会（EMS）、Social Peace Service Kassel, e.V. (SFD)(以上ドイツ)、Brethren Volunteer Service (米国)

アジア学院フレンズデーにて

シナジーが生み出す、前進する力

販売活動報告

佐藤 裕美
募金・国内事業課
(販売・広報担当)

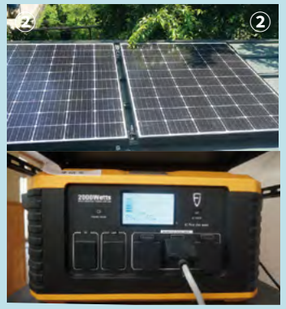
海外からの学生が入学できた一方で、2020 年から続く外部イベントの自粛や取引先である飲食店の営業が停滞するという状況にあって、年度当初の販売活動による収入の見通しは決して明るいものではありませんでした。また、販売業務を手伝ってくださるメンバーが体調を崩し休養されるという事態が度々発生し、限られた人材で既存の業務をどのようにカバーするか、協力しあうことの大切さをより実感させられることもありました。さらに年度の半ばから後半にかけて、物価上昇や卵など市場流通が停滞する商品への需要の高まりを理由に、2014 年以来維持してきた一部農産品価格の変更を実施しました。このような状況下で、失敗した場合のフォローや振り返り、そして今後の改善策を共有しやすくなるよう、全員が顔を合わせる休憩時間をこまめに組み入れるなど、前向きでオープンな雰囲気を保つ工夫をしました。

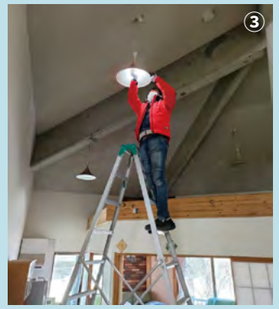
日本人卒業生や元職員・元ボランティアが出店するフレンズマルシェの企画と準備では、初めての試みにて試行錯誤しましたが、多くの方と出会い対面で会話する楽しさ、懐かしい人々との再会、地元の人々が気軽にアジア学院を知る機会を提供することができ、買い物以上に心の豊かさを感じられたとの感想を頂き、次回に繋がる結果を得ることができました。いくつかの課題解決に際して、その時点での条件を鑑みつつ協力するメンバーの力が最大化できるよう、シナジーを生み出す過程を学ぶことができた、有意義な 1 年となりました。

2022 Snapshots

50 周年事業が始まりました

2023 年に 50 周年を迎えるにあたり、5 つの重点項目のひとつ「気候正義・気候変動対策」の関連プロジェクトとして下記の 4 つのプロジェクトを行いました。





① ごみ組成調査

10 月 25 日（火）～ 11 月 1 日（火）、NPO 法人木野環境協力のもと、アジア学院から排出されるごみを調査しました。この結果をもとに、今後もごみの削減とリサイクル率向上による気候変動対策を推進していきます。

② 教室の《太陽光発電―蓄電―消費の見える化》システム工事

教室の南側の延長した屋根の上に設置された 4 枚のソーラーパネル（12.6kw x 4 枚）で教室で使用する電気を発電し、その電気を教室内に設置したバッテリー（2000Wh x 2 台）に蓄電します。蓄電容量と消費容量がそれぞれバッテーリーのモニターに表示されるため、どれだけの電力が蓄電され、また消費されているのかが常に分かるようになっているので、自分が使用する電気についてより意識的になる教育効果を期待しています。バッテーリーが空になったら既存のグリッド電源に切り替えができるようになっていますが、バッテリーがフルの場合、1 ～ 2 日太陽が照らなくても教室で使う電気は賄えます。

③ 全館 LED ライト設置

学院内のすべての蛍光灯（342 本）を消費電力が少なく寿命も長い LED 蛍光灯に交換しました。これにより、電気代だけではなく二酸化炭素の大幅な排出削減も期待できます。

④ オフグリッドハウス

外部からの電気、ガスなどのライフラインに頼ることなく単独でエネルギーの自給自足生活ができる家「オフグリッドハウス」の建築が、1 月末から那須セミナーハウスの裏庭で始まりました。

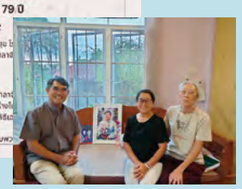
訃報

金子 美登 氏
埼玉県小川町有機農家

日本の有機農業をけん引してきた埼玉県小川町の霜里農場の金子美登氏が 9 月 24 日逝去されました。アジア学院では毎年研修で小川町を訪問しています。後継者の金子宗郎氏（旧姓石川）はアジア学院の 1995 年の卒業生です。

浅井 重雄 氏
元アジア学院職員（1973 年～ 1983 年）

創設期のアジア学院の職員として、特に野菜栽培の分野において農薬や化学肥料が使われていた時代に、無農薬・有機栽培のパイオニアとして大きな貢献をされた浅井重郎氏が 10 月 15 日にタイ国チェンマイで逝去されました。
浅井さんはタイ国出身のアジア学院卒業生のスチトラ・パンツーニさんと 1975 年にご結婚、1983 年にはご家族でスチトラさんの故郷タイに移住、ハンセン氏病の回復者の施設で自給農場の指導をされました。



浅井氏の奥様スチトラさん（右端）を弔問してくれた Narong& Pat 夫妻（共にアジア学院卒業生）

農村を動かす卒業生たち

Graduates at Work

（写真左）Kenny's Farm に参加者と卒業生が大集合
（写真上）ホームステイで現地のリアルな暮らしを体験
（写真下）フードフォレストでコーヒーを収穫

インドネシアの卒業生を訪ねるキャンプ

江村 悠子
募金・国内事業課
(支援者サポート)

2023年2月、同志社大学の学生団体である国際居住研究会（以下、「居住研」）との協働により、「Indonesia Grad Camp (インドネシアの卒業生を訪ねるキャンプ)」が初めて実現しました。居住研メンバー9人とアジア学院職員2名で北スマトラ州を訪れ、インドネシア国内の移動を含めて10日間のプログラムを行いました。

10日間の中で私たちが最も長い時間を過ごしたのが、フェニー・タンプボロン（05年卒、12年TA、写真左①）と石田賢吾（12年卒、写真左②）夫妻が運営する Kenny's Farm です。Kenny's Farm は二人が2015年から始めた、フードフォレスト（果実などの食料を調達できる森）を中心とする循環型の農場です。熱帯の気候の中で自然と共生しながら食べものを生産し、最小限の労力で何世代も先まで食べものを手に入れるために最適な方法だと賢吾さんは言います。周辺の農家とはやり方が異なるため、森造りを始めた7年前には周囲に訝（いぶか）しがられることもありましたが、自分たちのやり方を信じて地道に森を造っていき、今では地元の農家もアドバイスを求めてここを訪れるようにまでなりました。

参加者はここでフードフォレストについて学び、日々の農作業や動物の世話や調理に参加し、二人の卒業生と生活を共にする中で多くの対話を持ちました。フードフォレストという農業のあり方は参加者にとって新鮮で、持続可能性を考える上で大きな学びとなったようです。

ある参加者はこう語りました。

「賢吾さんとフェニーさんは、農場と環境と自分たち自身との関係について長期的な視野を持っています。また、自然と共に生きる責任を自覚しています。お二人を尊敬すると同時に、自分もそのように生きていきたいです。」

もう一つのメインの訪問先が、ガニ・シラバン（08年卒、写真左③）が主宰するコーヒー農家組合、KSU ポム協同組合です。コーヒーを愛してやまない彼はこの組合を通じて地域のコーヒー農家を支え、組合員や地域の若者に対して有機コーヒーの栽培や加工の教育をしてきました。今は教育により一層力を入れるため、種から一杯のコーヒーになるまでの全工程を学べる「コーヒースクール」の立ち上げに情熱を注いでいます。アジア学院での印象的な学びとして「ネットワーキング、つながり作り」を挙げる彼は、同じく卒業生であるジュンピター・パクパハン（08年卒、写真左④）やランピタ・シラバン（14年卒、写真左⑤）と協働して、障がい者に向けた職業訓練の場としてもコーヒースクールを活用しています。

参加者はここで種から一杯のコーヒーになるまでの工程を経験するとともに、ガニさんやジュンピターさんのストーリーに耳を傾けました。

「普段の食にかかっている手間や、ただ栄養源としての物質ではなく命をいただいているという事実を身をもって理解することができました。」

こうした農業や食に関する学びはもちろんですが、多くの参加者にとって最も印象に残ったのは卒業生自身からの学びでした。農村指導者としてのあり方の多様性、また自分の取り組みへの愛や信念は、これからどう生きていくかという問いに日々直面している大学生にとって大きな刺激や励ましとなりました。

「先のことや結果がうまくいくかなんてわからなくても、やってみようという気持ちを持ち続けて頑張ることの大切さを学んだ。自分も気になったことや興味を持ったことに対してもっと踏み出す勇気を持ちたいと思った。」

様々な卒業生に出会う中で、参加者の中にこれからの歩みへの希望や気づきが生まれたことが何よりの喜びです。

アジア学院でゴミの組成調査を行う丸谷一耕さん

コイノニア座談会

トピック別オンラインディスカッション

アジア学院では、世界中から集まった人々がコイノニア食堂の大きな円卓に座って、あらゆる話題について語り合っています。ある人は世界の問題を解決するために、またある人はクリケットの試合やポップミュージックについて議論しています。どんな話題であれ、この多様な多文化的背景が、それを学びの場へと変えていくのです。アジア学院のこの環境は「学びのコミュニティ」であり、食卓にも学びがあふれています。

そして今、この学びのコミュニティはアジア学院のキャンパスの外にまで広がっています。Zoom を利用して、卒業生が世界のどこにいても、それぞれの地域の課題を話し合い、知識や経験を共有することで解決策を探っています。

コイノニア・ラウンドテーブル・ディスカッションと呼ばれている卒業生の座談会があります。第 1 回はコーヒーの栽培、加工、販売について、第 2 回はリクエストに応えて廃棄物処理について話し合いました。消費経済が地方にまで拡大するにつれ、ゴミが山積みになり、地方の人々はその対処法を知りません。6 カ国から 7 人の卒業生が集まり、ゴミ問題にどのように対処しているのかを共有しました。彼らの活動は、汚染から環境を守るための村人への教育、堆肥作りのトレーニング、リサイクルなど多岐に渡っていました。また、アジア学院の元ボランティアであり、自治体に持続可能な廃棄物管理についてコンサルティングをする NPO を運営する丸谷一耕さんもこの議論に加わりました。

QRコードから、ディスカッションの様子をご覧いただけます。

https://youtu.be/DxQuLjBZWIU

シエラレオネ

チェンジメーカーとしてCNN に登場

マンブッ・サマイ（18年卒）

マンブッ牧師は、CNN のドキュメンタリー番組で、脚や腕の切断者の生活を改善するための活動が評価され、「チェンジメーカー（変革者）」として紹介されました。91 年から 10 年に及んだ内戦後、マンブッ牧師は脚や腕を失った若者を集め、切断者のサッカーチームを作りました。スポーツをするというシンプルな行為が、彼らの自信を高め、自分の人生をコントロールすることにつながるのです。アジア学院卒業後、マンブッ牧師は切断者が自分たちの食べ物を育てることで生計を立てることができるように「サッカーガーデン」を立ち上げました。「これが可能なのは、アジア学院の研修が、私の人生と人格に大きな影響を与えたからです」とマンブッ牧師は言います。

CNNの番組はこちら！
マンブッ牧師のパートは11:05からです。

https://edition.cnn.com/videos/world/2023/01/31/ntando-mahlangu-south-africa-paralympics-mambud-samai-sierra-leone-amputee-football-intl-spc.cnn

ミャンマー

種の畑

タウン・スィー（12年卒）

タウン・スィーさんは、リス・バプテスト神学校でプログラム・コーディネーターを務めています。彼はアジア学院の卒業生であるサムイェ・ビャさんと一緒に、持続可能な生活訓練というプログラムを始めました。このプログラムの中で、タウン・スィーさんはコミュニティのシードバンクと呼ばれる種の保存所を作り、キャンパス内に種子を育てる畑を管理しています。この畑の傍らには、種を保管するための小さな土壁の家があり、これは彼が仏教の僧侶の助けを借りて建てたものです。タウン・スィーさんは、神学校だけでなく、より広いコミュニティのために、食糧主権とシードバンクに関するトレーニングセッションを定期的に開催しています。

タウン・スィーさんのシードバンクについてはこちら！

https://youtu.be/0TB06wsD_YA

リベリア

食と教育

パトリック・クリエ（19年卒）

パトリック牧師はアジア学院から帰国後、すぐに「Food for Education Program（FEP）」と呼ばれる活動を開始しました。子どもたちにキャッサバの育て方を教え、そのキャッサバを売って学費をまかなうというものです。2022 年、彼は自由ペンテコステ大学の農学部の畑を手伝い始めました。最初のプロジェクトは、ピーマンやナスの苗のための高架式苗床の建設でした。これは同大学の有機農業のデビュー作で、パトリック牧師は「大学生が私を通してアジア学院から学ぶことを喜んでくれている」と胸を張ります。

スリランカ

私のコミュニティには食べ物がある

レヌカ・グナワルダナ（04年卒）
トゥシャラ・ニルミニ（09年卒）

昨年前半に本格化した経済破綻後、人々は食料をはじめとするあらゆる物資の不足に直面しています。しかし、レヌカさんとトゥシャラさんが共に家庭菜園の作り方を教えている村では、食べるのに十分な量が確保されています。

「この困難な時期にアジア学院に手紙を出すことができるのは、私のコミュニティには食べ物があるからであり、それを嬉しく思います。ここでは人々が自分たちの農場で作物を育て自給しています。アジア学院での生活で、私は食料の育て方と保存方法を学び、その知識を人々と共有しました。また、食料安全保障のために重要な固有種も皆で共有しています。」- レヌカ

スティーブン・カッティング
卒業生アウトリーチ課

会計報告

Finances

貸借対照表

2022 年度末時点での資産は約 8 億 540 万円で前年度末よりも約 1,900 万円減少しました。減少には減価償却費約 3,670 万円（有形固定資産）が含まれます。将来への備えとしての退職給与引当特定資産 300 万円、施設設備維持引当特定資産約 260 万円、合計約 560 万円の積立ては例年通り継続することができました。

一方負債の部は約 2 億 130 万円で前年度末よりも約 1,700 万円増加していますが、これは前受金（特に次年度奨学金）の増額分となります。借入金返済(346 万円)、学校債償還(50 万円）の合計 396 万円は予定通り返済することができました。

資金収支

2022 年度末の翌年度繰越支払資金は 53,355,709 円でした。50 周年事業の一環としての教室太陽光発電システムの導入（約 199 万円）、コロナ禍で必要となったパソコンやオンライン機器の導入（約 160 万円）、サーバーの定期交換（約 215 万円）等の支出がある一方で、前述の前受金の増加等があり、前年度末と比べ約 460 万円多い状態で年度を終えました。

事業活動収支

事業活動収入　約 1 億 4,830 万円
（前年度約 1 億 1,900 万円、予算約 1 億 4,280 万円）

【主な収入】

学生生徒納付金：約 4,950 万円
（前年 700 万円、予算約 3,890 万円）
過去 3 年間にコロナの影響を受け保留となっていた 3 名分の海外奨学金（約 800 万円）及び予算外の国内奨学金（100 万円）が加わりました。またドル高円安の換金レートも影響し、全体で予算よりも約 1,000 万円増となりました。

寄付金収入：約 6,560 万円
（前年度 8,300 万円、予算約 7,610 万円）
国内寄付：約 2,910 万円（699 名・365 団体）
海外寄付：約 1,555 万円（アジア学院北米後援会及び 3 団体）
その他補助金：約 1,112 万円（国内 4 団体・約 274 万円／海外 7 団体・約 838 万円）、特別寄付：約 982 万円（一般 4 件・350 万円／50 周年指定 8 件・約 632 万円）

付随事業収入：約 2,693 万円
（前年度約 2,340 万円、予算 2,200 万円）
依然としてコロナ下で様々な制約がありましたが、予算比 122%、前年度比 115%となりました。販売は昨年度を 50 万円上回り、過去最高収入を更新しました。また、新たな企画としてアジア学院フレンズデー、オフグリッドハウス作り、大学生を対象としたインドネシアスタディツアー等も開催することができました。スタディキャンプは、コロナ対策の為、部屋の使用制限等により利用者人数は減ったものの、アジア学院の価値を再評価しプログラムの価格を上げることにも取り組み、アジア学院企画収入は過去 3 番目の高収入となりました。

事業活動支出　約 1 億 8,450 万円
（前年度約 1 億 6,090 万円、予算 1 億 8,500 万円）

支出はほぼ予算と同額で終わることができました。コロナ禍で海外出張・活動自粛継続による予算未消化があった一方で、燃料費高騰や円安の影響を受け過去最高額となった渡航費（約 690 万円、例年平均約 500 万円）や、光熱費高騰の影響を受け光熱費支出も例年の 1.5 倍（約 475 万円）となる等、予算を超える支出もありました。

（事務局長　佐久間 郁）

みなさまの開発途上国に対する思いをアジア学院に託してください！

アジア学院で学んだ卒業生たちが自らの手で、公正かつ平和で健全なコミュニティを作っていきます。

郵便振替

振込口座：郵便振替　0034-8-9758
口座名義：学校法人　アジア学院

銀行振込

足利銀行 西那須野支店
口座番号：112403（普通預金）
口座名義：学校法人 アジア学院

オンライン／クレジットカード

https://ari.ac.jp/donate

「50周年記念募金」受付中！

50周年を機に教育環境を充実させていきます。これからも種を蒔き続けることができるように、ぜひご協力ください！

銀行振込

足利銀行西那須野支店
口座番号：2962221（50周年特設口座 ）
口座名義：学校法人 アジア学院

オンライン／クレジットカード

https://ari.ac.jp/50th-anniv

貸借対照表

資産の部	2021 年度末	2022 年度末
流動資産	54,524,880	66,737,913
固定資産	769,803,155	738,668,829
有形固定資産	724,940,905	688,273,875
特定資産	44,465,530	49,998,234
その他の固定資産	396,720	396,720
資産の部合計	**824,328,034**	**805,406,742**

負債の部		
流動負債	31,860,663	84,231,471
固定負債	152,296,735	117,064,735
負債の部合計	**184,157,398**	**201,296,206**

基本金の部		
基本金の部合計	**1,211,374,835**	**1,216,499,839**

純資産の部		
翌年度繰越収支差額	-571,204,199	-612,389,303
純資産の部合計	**640,170,636**	**604,110,536**
負債及び純資産の部合計	**824,328,034**	**805,406,742**

詳しくはアジア学院ウェブサイトでご覧ください
https://ari.ac.jp/downloads/

事業活動収支

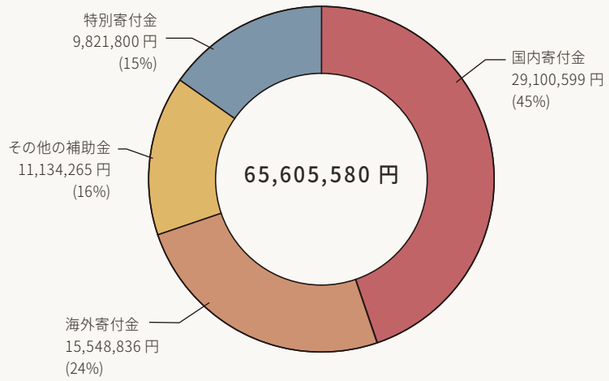
事業活動収入の部	2022 年度予算	2022 年度決算
教育活動収入		
学生生徒等納付金	38,852,105	49,504,137
手数料収入	52,000	5,600
寄付金	76,120,690	65,605,580
経常費等補助金	0	221,827
付随事業収入	22,056,000	26,928,522
雑収入	5,716,000	6,008,128
教育活動収入計	**142,796,795**	**148,273,794**
教育活動外収入計	**0**	**156,573**
事業活動収入計	**142,796,795**	**148,430,367**

事業活動支出の部		
教育活動支出		
人件費支出	85,798,536	84,730,513
教育研究費	31,008,897	28,263,981
管理経費	67,388,275	70,899,312
減価償却費	42,268,895	43,004,973
教育活動支出計	**184,195,708**	**183,893,806**
教育活動外支出計	**869,982**	**596,661**
特別支出計	**0**	**0**
事業活動支出計	**1,85,065,690**	**184,490,467**

資金収支

前年度繰越支払資金	48,763,067
翌年度繰越支払資金	53,355,709

寄付金の種類別割合



監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第 7 条の規定に基づき、2022 年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2023 年 5 月 10 日
学校法人アジア学院

監事：大久保知宏

監事：村田榮

共に生きるために　2022年度　事業報告書　2023年8月15日発行　発行元：学校法人アジア学院　発行人：荒川朋子　編集人：江村悠子、八木沢淳　表紙絵：八木沢淳

2022年度　卒業生

（）内は送り出し団体名

農村開発科

インド
1 ンガムシェル・ロングロ（弱者のための開発協議会）
2 カンナン・ラヴィチャンドラン（スリスティ基金）
3 ゾポヴェル・ロヘ（グレースホーム・クツクノ）
4 グレザーソン・チェラン・モミン（ハーディング神学大学、ハーディング・ユニバーサル・トラスト）
5 ルンガイトゥイ・マラングメイ（チントゥー基金、ロンメイ・バプテスト協会）

インドネシア
6 ベルマン・マエダ・シトゥモラン（インドネシアプロテスタント教会）
7 タビタ・プリシラ・ラハワリン（アブディ・プサカ・インドネシア基金）
8 ディアン・クリスタ・シテプ（カロ・バタック・プロテスタント教会）
9 ムンティラン・ハシホラン・ナババン（ペトラサ基金）
10 アデ・プジ・ハルタティ（ピドー社）
11 ヤン・ペトリック・ラジャグクグク（バタック・プロテスタント教会）

ウガンダ
12 ティモティ・センタム（カセンジェ・リバーフォード有機農業センター、ガール・ナウ基金）

エチオピア
13 デガガ・ワクシュマ・ゲレタ
14 デミセ・ソロモン・デュフェラ

ガーナ
15 アレックス・クワムラ・アフェリ（アソグリ・ステート議会）

グアテマラ
16 エステル・ブリット・レイムンドゥ（グアテマラ福音教会協議会）
17 マルタ・ブリット・ブリット（グアテマラ福音教会協議会）

ケニア
18 ジャクリーン・アンヤンゴ・オワング（参加型開発研修所）

コンゴ民主共和国
19 モルデカイ・ミリンディ・ジョナス（平和・紛争解決基金）
20 シュクル・ムニグワ・セラフィン（中央アフリカペンテコステ教会コミュニティフヌ・ヌル）

ナイジェリア
21 オニェカチ・サムエル・エゼ（アフリカ教会機構）
22 アデトゥンジ・デービッド・アジャラ（ナイジェリアメソジスト教会）

バングラデシュ
23 ショット・ムリー（バングラデシュ教会）
24 ラチンモン・アイザック・ムルイ（基礎的開発パートナー）

ベトナム
25 ユン・ンゴッ・ヴォ（メコン・オーガニック　ユン・クロンナン農園）

マレーシア
26 モハド・クザリー・ビン・ハミッド（SRI ラヴリー複合有機農園）

ルワンダ
27 グレース・フラハ（ルワンダ自由メソジスト教会）

日本
28 古条 知也
29 須田 愛結
30 中島 のぞみ
31 得丸 拓海

研究科

インドネシア
32 マーガレット・マルタ・ロイダ・シアニパール（バタック・プロテスタント教会 エリム孤児院）

ネパール
33 ビム・バハドゥール・カリン・ライ（全国開発機構）

日本
34 岡田 英里
35 加藤 圭介
36 小松原 啓加

ARI 共に生きるために
address
〒329-2703
栃木県 那須塩原市 槻沢 442-1
email info@ari.ac.jp
tel 0287-36-3111
fax 0287-37-5833
website ari.ac.jp
Facebook 学校法人 アジア学院
Instagram @asian_rural_institute
学校法人 アジア学院